

満鉄 中央試験所

大陸に夢をかけた男たち (六)

杉田望

第五章 いかにして中央試験所を残すか

大連の上空を覆った焚書の炎

敗戦のその日、内海治一^{うつみはるいち}満鉄調査局長は調査局全員を講堂に集め、最後の訓辞を行っているところだった。一声も発するものとしてなく、広い講堂は水を打ったように静まりかえっていた。局員たちは息を呑んで、内海治一局長の言葉をまっ
ている。

「我々満鉄マンは、四十年になんなんとする長年の間、各種の調査、研究の成果をおさめてきた。しかし、本日敗戦の悲局に直面し、これまでのすべてが無に帰したことを覚える。私は、いまさら皆さんに何もいうべき言葉をもたない。ただ我々の成果を……」

内海治一は、傲然と肩を張り、言葉を続けた。内海の表情には、悲壮な決意が滲み出ていた。微かにすすり泣きする声が聞こえてくる。内海局長の語り口は、何か自分に言い聞かせているかのようでもある。

「ひとさまに差し上げたくないし、差し上げる義理もない。資料全部を我々の手で焼却して、我々の仕事にピリオッドを打ちたい……！」

そこで内海治一局長はひと息つき、言葉を切った。内海治一局長の態度は、いつもと変わらぬようにも見える。いや、軀が微かに震えているようにも見えた。内府は噛みしめるように「ひとさま」と二度繰り返して言った。その言葉の間の合いのなかに、大きく転換を始めた歴史の歯車のキシミを感じ取られた。

満鉄の調査局は、赤煉瓦作りの本社ビルの五階全部を占め、その建物はコの字型の中庭を抱いていた。その日の大連は、よく晴れ上がり、調査局ビルの屋上からは、大連湾の浅葱色^{あさぎ}の海が一望に広がり、南山の洋風社宅の青や緑の屋根が、真夏の陽光に照り映えているのが見渡せた。静かで、平和な光景だった。この大連が昨日まで空襲の危険にさらされていたなんてまるで嘘のように静かだった。

各階の窓から書類や文献が次々と投げ下ろされ、局員たちは、自らが作り上げた膨大な資料や書類の破棄を始めていた。書類の山にガソリンをかけ、火が放たれた。気の滅入る作業だ。誰もが無言で従っていた。

「ひとさまに差し上げる義理はない」

と内海局長は躊躇なくいった。

だが、それは内海治一の独断で決めたことではない。資料破壊の指示は、終焉のときを迎えた南満州鐵道株式会社首脳の公式な意志でもあったのだ。こうして、満鉄資料の破壊作業は始まるのだが、破壊作業はソ連が大連に進駐するまで一週間あまり続いたという。

しかし、実際に破棄された関係書類は、人事関係の文書や対ソ関係の対処方針など、本社総務関係の機密文書、軍との関係を示す文書、あるいは御真影など皇室関係の資料が中心で、満鉄調査部や中央試験所が作った資料を組織的に破棄したわけではない、という当事者たちの証言もある。

要するに、満鉄首脳が資料破棄を指令したのは、関東軍との関係など、軍との協力関係を示した文書が中心であり、それは満鉄関係者が戦犯容疑を恐れたためで、例えば、アジア経済研究所の図書資料部にあって満鉄研究を進めている井村哲郎^{てつお}も、終戦当時、満鉄首脳が組織的に調査資料破棄を命じたという説には、否定的な見方^{ささくろまさお}をしている。

だが、笹倉正夫は終戦時の焚書の事実、それがいかに切なく辛いものであったか、あの終戦の痛恨の出来事を、彼が帰国後書き残した「人民服日記」のなかで証言している。笹倉正夫が属した、鉱床地質調査室は調査局ビルの最上階にあり、大連湾とその周辺が一目で見渡すことができた。

「私か南山やアカシアの青葉を哀惜している間に、局長指示による書類の破棄が早くも中庭ではじまっていた。窓から投げ下ろされ、中庭に集積された書類に、数人が火をつけている。数十年の間に積みかさねられてきた、知識の果実は、朱色の炎となって、真夏のかげろうに化していく……。私の知識も、炎となり白煙となって消え去る。あとには痛恨極まりない虚しさと、悔いても足りぬ切なさが残った」

長く尾を引く焚書の白煙は、遼東の空遠く消えていったのである。赤煉瓦のビルから立ち上る白煙は、まる一週間もの間、大陸の上空に淡く漂っていたという。



旧満鉄本社ビル

もちろん、焚書のうきめにあつたのは、笹倉自身が書き上げた調査報告書だけでなく、そのなかには科学的にも高く評価される貴重な研究報告の類などが数多く含まれていた。

敗戦のその日を、東京の満鉄総裁公館で迎えた男がいた。伊藤武雄元満鉄上海事務所長だった。伊藤は「満鉄事件」に連座して、浪々の身の上だったが、空襲で焼け出され、敗戦間際から社宅に改装された狸穴の満鉄総裁公館で寝起きをしていたのだ。

「創成のはつらつきに比べ、崩壊の何と味気ないことか。営々人間苦難の一世代の歴史のなかから、何が残り、何が生まれたのか」

伊藤は自問を繰り返していた。東京帝国大学の学生時分に古野作造博士の講義で民本主義の洗礼を受け、新人会しんじんかいの結成に参加するなど、多感な青春時代を送った伊藤武雄にすれば、満鉄が中国大陸でいかなる歴史的役割を果たしたかは、もちろん、充分知り尽くしていた。そして、敗戦という実態は、予期した結末だったとしても、それでもなお、満鉄の終焉を直に確かめることは、やはり、辛く切なく、悲しいものだった。無理もない。青春のそのほとんどを満鉄調査部に捧げた男であつたのだから……。

敗戦から占領へ。東京も混乱の極致にあつた。大連の本社と連絡が絶たれた東京支社では、誰もかもが右往左往の状態で、部内は混乱を極め、なすすべを知らなかった。伊藤の関心事は、満鉄の調査マンたちが築き上げた膨大な資料だった。一つは、東京所在の東亜経済調査局に蓄積された満鉄の膨大な資料。空襲の難を避けるため、資料類は福島に疎開させてある。それをどうすべきか、逡巡しているうちに九月末、満鉄は占領当局によって、閉鎖機関に指定される。満鉄調査部が四十年もの歳月を費やして作り上げた資料は……。

「満鉄に乗り込んできた占領軍の二世が福島の疎開先に出掛け、その膨大にして価値高きことに驚き、疎開の荷造りのまま、さつさとアメリカに運んでしまいました。ロシア語文献と調査部の調査資料を中心とする日本語文献に最も価値を認めたのです。ついでに申せば、東亜研究所の蔵書は二本松に疎開してあったのですが、東亜研究所は閉鎖機関の指定を免れたにもかかわらず同様な方法でアメリカに運ばれていきました」

と伊藤はのちに語っている。

占領軍には極東戦略や対ソ戦略を策定する上で、満鉄が作った資料は、よほど重要な意味をもっていたのであろう。東京支社を含む本土に残された資料のいっさいは、米国占領当局の手で接収されてしまった。

かたや大連の満鉄本社では、満鉄調査マンたちの汗と血とによって作り上げられた「知識の集積」が満鉄自身の手で無惨にも火がつけられ、早秋の大陸の大気のなかに淡く吸い込まれていったのである。

研究施設の引き渡しを潔く決断

敗戦の九月初め。その同じ大連に居を構える満鉄中央試験所では、職員たちはソ連軍の接収を数日後に控えて、丸沢常哉所長の早朝の訓辞を聞いていた。丸沢の表情はいつになく厳しかった。

「ソ連軍が接収に乗り込んできたら、中央試験所はどう対応するのか、中央試験所はどう処分されるのか」

「シベリア送りもありうる」

所内にはそんな噂が流れていた。

ともかく、中央試験所は世界的にも名の知れた研究所だった。それが軍部に協力しないということは信じ難いことだ。そう進駐軍ソ連が考えても少しも不思議な話ではない。

だが、研究者たちにいわせるならば、満鉄中央試験所は満洲大陸の開発のために存在した研究機関であり、決して関東軍の下請け研究機関ではなかった。満鉄中央試験所の科学者たちは、そうかたく信じていた。

自分たちが満洲大陸で手掛けたことは、満洲資源の開発であり、自分たちは開拓植民に燃えて研究にあたってきた。だが、そんなことをソ連の兵隊を相手に言ってみても、通用するかどうかは疑問だった。

ソ連の出方がわからないだけに、研究者たちの不安は日が経つにつれ、さらに増幅されていった。いや、それだけでなく、敗戦のドイツからは科学者たちが、どんどんロシアに連行されているという噂も大連には広がっていた。噂は研究者たちを恐怖に陥れた。

そうした状況からすれば、研究資料を破壊し、研究内容を進駐ソ連軍から秘匿^{ひとく}する動きが出たとしてもこれはおかしいことでない。研究者の一部には自らの研

究内容を密かに隠匿し、破壊する動きも出てきていた。

終戦から大連の治安は乱れ、進駐ソ連軍による強姦や略奪は日常茶飯事で、乱暴狼籍の限りをつくしている。頼りとしていた日本警察は、八月十五日以降、完全に無力化している。加えて中国人による日本人排斥の動きも出てきている。

中央試験所には高価な実験施設、白金やコバルト、金塊などが大量に保有されていた。それを暴徒に狙われる危険もあつた。が、所員たちが真に懸念したこと、それは中央試験所が四十年の長きにわたって築き上げた、その研究成果の行方だった。

終戦からしばらくして、ソ連軍人の姿がちらほら中央試験所にも見えるようになった。中央試験所に勤めていた中国人の間にも、不穏な動きがみられる。誰にも動揺があつた。満鉄中央試験所は資産の接收を巡って、緊迫した状況におかれていたのだ。

丸沢常哉は穏やかな表情で、場内をもう一度見渡してからいった。

「諸君、わが中央試験所は大石良雄の古智にならつて、研究成果を含め、一切合切を潔く引き渡そうではないか」

大石良雄の古智に例を取るなんぞ、いかにも明治の人間らしい。丸沢常哉が毅然とした態度でいったその一言に、場内には、ほつと安堵の淑息が漏れた。人は極限におかれたときにこそ、人間生来の本性がむき出しになるものである。よく出る場合も、悪く出る場合もある。それを押さえるのが理性というものであろう。丸沢常哉のその一言で、科学者たちは理性を取り戻し、動揺を抑えた。

終戦当時、満鉄中央試験所燃料研究室にあつて、石炭液化の研究を進めていた、石川三郎（現日本触媒化学工業代表取締役会長）は丸沢が「大石の古智」に例えて、研究所の資産を潔く引き渡そうと訓辞したいきさつを次のように証言している。

「実をいうと、あれは終戦からそう日は経っていなかったと思います。上司の阿部良之助博士が私たちを研究室に集めて、これから先どうなるかわからない、それでこれを分配することにした、そういつて研究室にあつた実験用の白金の坩堝^{るっぼ}を部下たちに配分したのです。それを後で聞いた丸沢常哉所長が大変怒りましてね。たとえば、フラスコ一つだろうと勝手な資産の処分は許さない。中央試験所の資産は正当な相手に潔く引き渡そう、という訓辞になったのです」

阿部良之助博士だけでなく、少なからず研究者は終戦の混乱のなかで動揺を来し、研究資料の破壊に走っていたのだ。例えば、丸沢常哉とともに中国に残留して、最後まで行動をとにもする小田憲三は、往時を次のように振り返っている。小田は帰国してのち、丸沢の阪大教授時代の教え子である八谷泰造が経営する日本触媒化学工業に入社、同社の研究所長を務めている。

「満鉄がなくなったのだから、この財産は誰のものでもないんだ、敵に渡すのはもったいないから、壊してしまえなどという極端な議論までありました。終戦の日でしたか、翌日のことでしたか、遅くまで残って技術書や書類を焼いたりした覚えもございません」

佐藤正典によれば、そのころ中央試験所では所員に対して、八月から向こう三ヶ月の俸給をまとめて支給したが、これが満鉄からの最後の給料となったのである。終戦と同時に預金も凍結された。満鉄の多くの社員たちは社内預金をしていたが、引き下ろしもままならぬ状況となっている。懸念されるのは、生活のことである。家族を抱えてどうするか。当時の状況からすれば、さし当てば、カネ目のものを確保することである。阿部博士が白金坩堝を燃料研究室の部下たちに分配したのも、そうした当時の状況を考えれば、領けない話ではない。誰もが生活に困窮していたということである。満鉄の紳士たちも、こうなると紳士を通してはいられなくなったのだ。

満鉄の「知的蓄積」をどう処分するか。満鉄の内部は、大きく揺れた。丸沢常哉は日本人職員に対してだけでなく、進駐ソ連軍に対しても同様な手を打った。萩原定司は次のように証言している。

日本人だけでなくソ連軍のなかにも、物品を要求し、中央試験所から勝手に物品を持ち出そうとするものがいたんです。それをコズロフ司令官と談判して、持ち出さないようにしました。また、その年の冬、薬品などを凍結させないように、当時は石炭も手に入らなかったし、ニクロム線もなかったものですから、鉄線に電流を通して、それらを守ったこともありました。中央試験所の施設や財産を研究再開までほぼ完全に保持できたのは、まったく先生の力によるものでした。先生は中央試験所の財産を完全な形で正当な相手に引き渡すことに命をかけたのです」

科学者というのは、純真で潔癖である。ことに丸沢常哉という人物はそうだった

た。が、丸沢所長が「潔く引き渡すこと」を決断したのは単にそれだけでなく、私にはもう少し先をよんでの決断であつたようにも思える。

そのことをはつきりさせるためにもう少し丸沢常哉が中国で歩んだ軌跡を追わなければならない。やはり、その二つの異なった系譜が、戦後日本に脈々として流れていると思えるからでもある。森川清も感動を込めて、次のように証言している。

「中央試験所はイデオロギーを越えた人類の尊い財産であるから、この試験所を誰に引き継ぐとしても、その人たちにすぐ研究が継承できる形で残したいということだったのですね。当時の混乱や不安を思うと、研究所のことより、まずわが身を考えるのが当然だったと思います。交戦した相手国に残すくらいなら、場合によつては破壊してしまうことだつてあり得たわけです」

ところで、これは余談だが、終戦間際に白金垺塙事件を引き起こした阿部良之助博士はのちに劇的な大連脱出を計る。阿部博士らの大連脱出は丸沢常哉にしてみれば「信じ難きこと」であり、身勝手な所行と映つた。

丸沢が何よりも心を痛めたのは、所内の団結であり、帰国するならば、全員一指に帰還できるよう、占領当局の無理な注文に対しても、老身に鞭打ち、頑張つていたのだ。丸沢が怒るのも当然である。

石川三郎は日本触媒化学工業の大阪本社役員応接室で、阿部博士の大連脱出の顛末を話してくれた。終戦から四年近くもたてば、誰も望郷の思いに駆られるのが人情。満鉄技術者の多くは、留用の身だった。いかに早く日本に帰るか、正直誰もが焦つていた。

あるとき、阿部良之助博士は、燃料科の部下など、ごく少数の人を研究所の一室に集めて、こういった。

「我々は終戦で国家目標を失った。今はいかにして早く内地に帰るかが目標だと思う。ともかく、問題はいかに日本に早く帰るかが先決だ。自分はある計画を練っている。ここに集まった諸君は、自分に何もいわずに身柄を頂けて欲しい」

石川三郎も誘われた一人だった。阿部は京都帝国大学工学部の先輩。また、二人は喜多研究室の門下生である。そんなことで、石川を誘つたのだろう。だが、石川は阿部博士の性格を知り抜いている。

「身柄を預けろといわれても、まず、計画を具体的に話してもらわないことには、

返事はできかねますね」

「それじゃあ、出ていってもらおうか」

「わかりました」

といって、石川二郎は短く答えると部屋を出た。阿部良之助ら数十名の研究者が集団で大連から忽然と姿を消すのは、それから一年後のことだった。

「後で考えてみれば、あの誘いは大連脱出だったのですね。迂闊^{うかつ}には乗れない、具体的な計画を明かしてくれるのもあれば活は別ですが、といって、断わったのです。一緒についていった連中は、山東に置き去りされてしまったと聞いています」

石川三郎は量子力学から哲学まで話題にすることができ、大変な教養人である。数年前に潰瘍で胃を半分ほど切り取ったといつて笑っていたが、長時間にわたるインタビューにもかかわらず疲れもみせず、このとき七十七歳という高齢ではあったが、どうしてどうして、元氣そのものだった。石川三郎の妻は丸沢が終戦時に中央試験所の所長の職にあつたときの秘書を務めていた。石川大婦は今でも丸沢常哉のことを懐かしく思い出すという。

中央試験所の所員たちは、昭和二十二年二月に内地帰還が始まるその日まで、一部の例外を除けば、丸沢所長の統率のもとで団結して、行動をとみにした。昭和三十年に最後の研究者が大陸から引き揚げるまで、大陸に残った満鉄中央試験所の研究者たちは、丸沢精神に支えられ、困難に堪えて、生きていくことになるのだ。

消えた膨大な満鉄関係資料

満鉄中央試験所だけでなく、満鉄調査マンたちが残した資料は膨大だった。伊藤武雄によれば、大連の文献書庫貯蔵分だけでも、五万点以上を数えたという。旅大（旅順、大連）をソ連軍が接収した際、貨車二台分の資料をソ連に送ったとも、立ち会ったとも満鉄関係者は証言している。また、東京の東亜経済局に貯蔵された資料類は、米占領軍の手で、アメリカに持ち去られた。

満鉄調査マンたちが作り上げた膨大な資料のうち、大連本社に残った資料は、調査マン自身の手で灰塵に帰した。

満鉄の調査マンたちが、その四十年間に提出したレポートは六千二百件に達し

た。

日本から押収した満鉄資料を、八年もの歳月を費やして整理にあたった楊覚男（中国系米人で満鉄研究者）は「この成果は二十世紀アジアにおける知識の大宝庫ともいえよう」と高く評価している。

また、伊藤武雄がいうように、満鉄資料は「専門知識のインダストリアリゼーション」が見事に結実したものであった。

草柳大蔵にいわせるならば、満鉄調査部はかつて日本が持ちえた空前絶後の知識集団であった。だが、満鉄は敗戦とともに、存在を否定され、組織は徹底的に解体された。

戦後、満鉄資料は数奇な運命を辿ることになる。満鉄資料のなかには、詳細な兵要地誌や歴史地理関係の文献もあった。中ソ軍事関係が緊迫した一九七〇年代には、亡霊のように満鉄資料が軍事関係者の間をかけ巡ったこともあった。とくに東アジアの兵要地誌など、軍事に関連した文献や資料の類は高値で取り引きされたりもした。

その満鉄資料の収集を巡っては、幾つかの議論がある。例えば、戦後派の満鉄研究者の一人である山田豪一^{やまだごういち}は中ソ関係が悪化した当時、満鉄の資料が内外でにわかに脚光を浴びたことと関連させ、「役立つとすればそれはロクなことにはならない」といつている。

しかし、文献類の貴重さを惜しむ旧調査部関係者の声は強い。戦後散逸した満鉄資料は、政府系の研究機関であるアジア経済研究所の書庫に集積されつつある。

また、旧満鉄関係者の有志が国会議員に働きかけるなどして、国会図書館に満鉄関係文献を集めた、特別室を作る動きもある。

これらの満鉄資料はいずれも法文系の調査マンたちが書き上げた資料である。これに対して、満鉄の自然科学者たちが作り上げ、終戦のあの混乱したさなかに、丸沢常哉の決断で「潔く引き渡した」研究施設や膨大な文献類が、今もなお大連化学物理研究所の書庫に大切に保存されている、という話を関係者から聞いた。地図で調べてみると、旧満鉄中央試験所は私が宿泊している民航大厦ホテルから歩いてわずかな距離にある。

日本時代の名称でいえば、伏見町と呼ばれたところだ。今は中山路と呼ばれる通りに中国科学院・大連化学物理研究所と名称を変えてはいるが、赤煉瓦の瀟洒^{しょうしや}

な造りの旧満鉄中央試験所は、慰蒼と繁るアカシアの樹木のなかに往時の姿をとどめていた。

応対に出てくれた弁公室の話では関係する満鉄資料は同じく大連市内の図書館に保存されているということであった。せめて丸沢常哉が命を張って守ったという、関係資料の所在だけでも確かめておきたいと思った。

翌日、大連図書館に出向いてみた。大連図書館は今は大連鉄路管理総局として使われている、かつての満鉄本社真つ正面にあった。若い女性の館員は、なかなか親切である。なるほど、本館裏の地下倉庫には、膨大な資料が保存されていた。

うず高く積み上げられた資料類には、積年のほこりが溜っている。このなかには萩原定司が整理にあたった貴重な文献も含まれているはずだ。だが、どれがどれだか、分類がちゃんとしてきているかどうかは疑問である。これでは目的の資料を探すどころの話ではない。一部は北京に保存されているという。

図書館の人の話だと、現在新しい図書館の建物を建設中とかで、それが完成すれば、研究者に便宜を図るため、満鉄資料を公開することも考えているということであった。それに期待したいところだが、それがいつのことになるのか、私の質問に若い図書館の女性職員はただ笑っているだけだった。

ソ連進駐軍に財産目録を提出

終戦とともに満州における鉄道をはじめ鉱山や製鉄所、オイルシェール工場、石炭液化工場、大豆油脂工場、文化施設にいたるまで満鉄が所有する全ての施設は、短期間のうちに次々とソ連あるいは中国側の手で接収されていた。満鉄が大連に進駐したソ連軍によって解体が宣言されるのは、昭和二十年九月二十二日



大連図書館



中国科学院・大連化学物理研究所
(旧満鉄中央試験所)

のことである。全社員三十万人を擁した満鉄は、もろくも崩壊するのである。

満鉄は「中国長春鉄路公司」に名称を変え、新たに中ソ合弁会社としてスタートをきる。これにともなって、満鉄の社員たちは自動的に中長鉄路公司の社員となる。中央試験所の研究者や社員たちも同様に新しい中長鉄路公司に移籍することになった。

最後の満鉄総裁山崎元幹は万感の思いを込めて「全社員に告ぐ」を発表している。ときあたかも、湖風のすさぶ冬も間近い季節であった。中央試験所では、丸沢常哉所長が「全社員に告ぐ」を代読した。

「物資も次第に欠乏するうちに、やがて嚴冬もせまり、社員の大多数は生業を失い、住宅を追われ、いよいよ耐え難い窮乏の生活がせまってくるであろう。最もさみしく感ずることは内外の通信、交通が途絶して祖国の現況を知るよしもない。

日中の講和か成立して、いつの日に帰国出来るかさえ全く予測できぬ。この寂漠たる感情生活のなかにあつて、切に諸君に望むことは、長い間この大陸において訓練された満鉄精神を忘れることなく、このときこそ、その本領を発揮して貰いたい。豊かな者は貧しさへ、強きものは弱きものを助け、全社員が共同の運命に徹することこそ、われわれの大事な心構えである。そして心身ともに健康を守り抜いて、いずれは来るであろう祖国への帰還船を待とうではないか。

一番自分が、総裁として案じられることは、社員諸君の日々の生活態度である。何らの娯楽もなければ慰安もない。この現状に絶望することなく、楽しみを静かな読書に求めてほしい。この混乱の時こそ、読書を独り楽しむことは、またとなに修養の機会でもある。全社員の自重自愛を祈る」

ソ連軍の大連進駐は、昭和二十年八月二十二日から始まった。ヤマノフ少将を司令官とする大連進駐軍は、ヤマトホテルに司令部を設置、翌日、「人民の生命財産を保証し、治安を維持するから各自平常に営業を営み、また銃剣類の武器及びラジオ類は直ちに所管の警察署に提出すべし」と布告した。

だが、大連の市民の間には、満州奥地で繰り広げられたソ連軍の蛮行のニュースが伝えられている。ソ連軍司令部の布告を信じるものは誰もいなかった。

商店はシャッターを堅く閉ざし、大連の市民たちは、息を潜めてソ連軍の山方を窺っていた。それでも関東州庁では今吉敏雄^{いまよしとしお}長官以下日本人官吏は通常どおり

勤務につき、また、大連市役所でも別宮秀夫市長のもとで、通常の職務を行っていた。べつみやひで

八月九日のソ連軍の満州侵攻以降、内地はもちろんのこと新京に拠点を構える日本政府の出先機関である関東局、関東軍からいっさいの連絡は途絶していた。関東軍司令部も満州国高官たちも「首都」を放棄して、新京はもぬけの殻となっていたのだ。

満鉄中央試験所にソ連軍関係者が初めて姿を現すのは、終戦から半月を過ぎた九月初めのことであつた。丸沢常哉と石炭液化のことで知遇を得ていだ大連在仕のハンガリー人セッシヒ博士夫妻にとまわられて姿を見せたのは、二名のソ連軍将校だつた。

中央試験所にはロシア語に通じた人間は少ない。応対に出だのは新聞記者出身で当時中央試験所の総務課長を務めていた大形孝平おおがたこうへいだつた。大形はかつてモスクワに特派員として駐在したこともあり、語学だけでなく、ソ連の実情にも精通していた。

ソ連軍の二人の将校は中央試験所の財産目録を作り、それをロシア語にして明晩までに提出すること、また、顕微鏡や写真機などの提出をも求めた。

中央試験所の財産は膨大である。ロシア語に翻訳して、二十時間足らずの間に作成することは、どう考えても無茶な話である。大形は英語でなら可能かもしれないと応えた。報告を受けた丸沢常哉は、さっそく中央試験所の次長を務めていた吉村倫之助博士よしむらりのすけに指示し、高級所員三十名を動員して、徹夜で作成作業にあつた。英文による財産目録の作成は、どうにかソ連軍が指示した期限内にまとめることができた。

しかし、二名のソ連軍将校の狙いは、戦争協力者の摘発にあつた。それから数日間、中央試験所が軍に協力して、侵略戦争に協力した事実がなかったかどうか、二名の技術将校を中心に、研究者の一人ひとりと呼び出し、尋問を繰り返した。尋問は微細にわたり、執拗を極めた。廣田鋼蔵博士が「原爆開発」の嫌疑を受け、厳しい取り調べを受けたのは、このときのことである。

原子力開発研究の嫌疑

このとき、中央試験所に乗り込んできたソ連の調査官は、本気で中央試験所が

原子力開発に関わっていたかどうかを調べている。原爆開発の嫌疑は、濃厚であったようだ。

そのことは丸沢常哉の著書のなかにも出ていた。丸沢がその著書で書いた、原子力開発に関連した記述は次のようなものである。

「第一回の引き揚げで部員（地質部）は全部帰還し坂本博士ただ一人留用された。これは恐らくソ連側から強い引き留め策が講じられた結果であろう。それについて一つの挿話を思い出す。坂本博士は南海の海域付近にウラン鉱の賦存を発見し、地質学的調査を行った。この鉱石の成分は中央試験所において内藤伝一研究員の手で精密に分析された。聴くところによると、戦時中日本の軍部が航空機でこの鉱石を内地に輸送していたとのことである。終戦直後中央試験所を訪問したソ連調査団は、この分析表を本国に持ち帰った。ソ連領事はしばしば坂本博士を招き、このウラン鉱について口頭または文書で博士の説明を要求し、報告書を提出するたびに領事から謝礼として食料品等が贈与された」

正確を期するためにいっておけば、丸沢がここで書いている主旨は、要するに、中央試験所がソ連側から原子力研究の嫌疑を受けた事実を淡々と述べて、坂本峻雄博士の嫌疑を晴らすために自らも進んでソ連側に対して、その事実がなかったことを主張しているのだ。しかし、また、同じ著書のなかで、丸沢は次のようにも書いている。

「終戦後中央試験所を訪れたソ連アカデミーの調査団一行が廣田博士の重水に関する研究に強い関心を示したことと思ひ合わせ、坂本博士のウラン鉱についてソ連領事自身がしばしば面会を求めたのは、原子力に深い関係があったのである」

ここで丸沢常哉という廣田博士とは、廣田鋼蔵のことだが、廣田は実際、北海道大学に在職中に重水の研究にあたっている。それがために丸沢常哉も書いているように、廣田は終戦直後、重水の研究に関して、ソ連側から幾度も尋問を受けている。

まあ、重水といえば、中性子の吸収剤として使われる以外に用途は思い浮かばない。中央試験所という巨大な研究所が、軍の命令で原子力の研究にあたっていたとしても少しも矛盾はない、そうソ連側は見当をつけて、廣田を尋問したのではなかったのか……。

もう一つ、ここで想起しておかなければならないことは、例えば、阿部博士がそうであったように、ソ連が進駐するまでの一週間の間、研究成果と研究施設の一部が、破壊されている事実があることだ。それは多くの中央試験所関係者が証言しているように、研究内容によつては、ソ連に引つ張られるのではないか、という研究者たちの恐怖心が、研究内容の隠匿と破壊に走らせたのである。

それゆえに、内海治一が調査局の資料の破棄を命じたのである。だとすれば、たとえ、中央試験所が原子力の研究をやっていたとしても、ソ連側に徹底して隠すのは、状況から考えれば当たり前のことだ。もしやそのとき、関係する資料のいっさいを破棄してしまったのではないか、私にもソ連の技術将校と同じような疑問が膨らんでくるのだ。

例えば、ある関係者の証言によれば、満鉄の調査機関は、満州の奥地でウラン鉱石の開発なども行っていたという。

さらにもう一つ、付け加えておけば、満州における原子力研究に関しては、関東軍参謀本部の別室に原子力研究室があった、という関係者の証言を聞いている。関東軍が用意した研究室に出入りしていた男たちは、かなり怪しげな連中であつたが、その証言によれば、関東軍は無造作に三百万円もの研究費を出したりもしている。

彼らと中央試験所がどういう関係にあつたか、それが確認できれば凄い話である。その証言者が後日「申し訳ないが、あの話はなかったことにしてもらいたい」と奇妙な申し入れをしてきた後日談もついでに紹介しておく。

さらに、付け加えれば、ソ連に拉致された男もいる。その理山はいまだにハッキリとはしていない。例えば、畑は違うが田中九一も拉致され、行方不明になっている。廣田博士に対する徹底したソ連側の尋問。ソ連側は何か確証を握つたかのように、執拗な尋問を繰り返している。

それに、中央試験所の関係者たちは原子力の研究の事実を口裏を合わせたかのように否定する。これは、もしかすると中央試験所の原子力研究が中国側機関に引き継がれ、それが中国の原子力開発へとつながっていったのではないか、私はそんな大胆な仮説を立ててみた。

中国側の研究者たち、つまり、大連化学物理研究所の関係者にも、中央試験所が原子力開発に関連した研究を行っていた事実があるかどうかを尋ねてみた。あ

たりまえの話かもしれないがやはり、否定的な回答しか返ってこなかった。

その後、中央試験所が原子力開発に関わっていたのではないか、というソ連が抱いた嫌疑は、一応解かれたようだ。正確を期するためにいっておくと、廣田も坂本も無事日本に帰還する。

ただ、ここではソ連が原子力研究の嫌疑を抱き、関係者に対する徹底した尋問を行った事実と、中央試験所はそれはどの実力を持っていた研究組織であったという事実を指摘しておくにとどめる。

中央試験所が原爆開発を行っていたかどうかの詮索は別におくとして、中央試験所が戦時中、軍に対して研究協力を行っていなかったというのは、嘘になる。現に中央試験所にはロケット兵器の液体燃料が貯蔵されていた。これがソ連側に見つかったら大変なことになる。丸沢常哉は帰国のちに阪大時代の弟子や中央試験所関係者が催した「丸沢先生を囲む座談会」に出席して、そのときの秘話を初めて明らかにしている。

「ロケットの液体燃料の過酸化水素は、あれは試験所のなかでも一部の人が知らなかったのです。結局（ロ号兵器）というやつですね。軍に頼まれた研究について尋問されたとき、私はこの問題には触れませんでした」

所長の丸沢は、身を張って、研究者たちをかばいとおしたのだ。また、中央試験所の使命は満蒙の資源開発と満州における産業育成に目的があるので、軍事に關係するような研究をやってはいなかった、と繰り返して説明した。だが、果してその主張が受け入れられるかどうか、中央試験所の研究者たちには正直不安だった。

「丸沢先生が説明にあたったのですが、ソ連側は中央試験所の性格をどうにか理解できたようでした。それだけでなく、中央試験所の業績をソ連側は高く評価して、このことは、本国に報告するといつて、二人の将校は早々に引き揚げていました」

丸沢とともに、ソ連将校の調査尋問に立ち会った萩原定司は当時の緊迫した雰囲気話を話している。

モスクワの直轄管理

ソ連軍の来訪が頻繁になるのは、このころからであった。そのほとんどは、関

係する技術将校だった。だが、困ったことに、それが公的な任務を帯びているのか、それとも中央試験所の資産を目当てにやってくるのか、どうにも判然としないのだ。

明らかに怪しげな連中も紛れ込んでいた。なかには、関東軍の兵器の劣悪さを口を極めて罵倒したものもいた。事実そうなのだが、こういう場合、丸沢常哉はただ黙って相手のいうことを聞いているだけではない。

「日ソ間の不可侵条約の存続中になぜソ連は日本に戦争を仕掛けたのか」
剛直に反論を試みたりもしている。それでも丸沢によれば、ソ連軍の技術将校の態度は、概して紳士的であったという。

二名のソ連軍将校が中央試験所から姿を消してから三週間後のこと。ガベツカ大佐を団長とするモスクワ大学の教授を中心に組織されたソ連アカデミーの調査団が中央試験所を訪れる。

丸沢の記録によれば、昭和二十年十月一日午後二時ごろであった。これが最初の公武調査団であった。調査団はガベツカ大佐を始め、メンバーのほとんどは佐官級の技術将校で、英・独いずれかの言語に通じていた。彼らは研究所内を一巡したあと、

「明日から当分の間、中央試験所に通い、この研究所がどのような研究を行っていたか、専門別に研究員から事情聴取を行う。試験所の刊行物と研究論文の別刷を取り揃えておいてもらいたい」

といい残し、その日は帰った。翌日から約二週間、彼らは毎日中央試験所に通い、異常な精勤ぶりを発揮して、研究員からは各々専門分野についての研究内容を詳細に聴取するなど、調査は徹底して行われた。

ガベツカ調査団は、姓名不詳の二名のソ連軍将校の報告を受けていたらしい。その報告をよりどころにして、各研究者との間で専門領域にわたった打細な調査を実施した。やはり彼らの関心は戦争協力の有無にあった。そのことを執拗に尋問した。

萩原定司によれば、敗戦の時期から五カ月の間にガベツカ調査団を含めソ連本国から三つの調査団が中央試験所にきている。萩原はソ連当局との折衝の模様を話している。

「終戦の九月にきたソ連軍の技術将校は試験所が直接戦争に協力をしたかどうか

かということ調べた。ついで十月に姿をみせたのがガベツカ調査団。モスクワ大学やアカデミー会員など十名からなっていました。このときは丸沢先生の著書にありますように、主要研究者の一人ひとりに会って研究内容や業績を詳しく調査したんですね。

その結果、試験所を高く評価し、モスクワの研究機関の傘下に収めることを示唆し、各人に希望研究テーマとその予算を提出させて帰った。十一月に入ると、ソ連科学アカデミーからポポフ博士夫婦がやってきた。これは念おしの調査だったようです。ポポフさんは試験所の活動を再開すべきだということを示唆されたのです。ですから中央試験所の研究員も、研究再開に期待を持つようになったのです」

ガベツカ大佐たちは、どうか、中央試験所の研究内容を理解できたらいい。ガベツカ大佐はモスクワに帰還するに先立ち、所員を一堂に集めて、この研究所は素晴らしい研究成果を上げていることがわかったので、モスクワに帰ったならば、上級機関に報告し、研究活動が再開できるように尽力してみたい、と話している。

調査団一行はモスクワへの帰路長春に立ち寄り、中長鉄路公司の副理事長を務めていたカルギン中将と向談し、調査結果を報告した上で、中央試験所に予算を与え、研究活動を再開させたらどうかと、進言したことを、当時化学工業委員会幹事の職にあった森川博士から丸沢のもとに知らせてきている。ソ連側は中央試験所を高く評価して、早期に研究活動を再開させることを本気で考えていたようだ。研究者たちは研究活動の再開を待ち望んでいたのだ。終戦の混乱が続くなかで、研究活動が再開できるかもしれないというニュースは、これは確かに研究者たちにとっては朗報だった。

研究者にしてみれば、再び研究活動ができるようになることは、確かに一つの希望であつたに違いないが、問題は生活をどうやって維持していくかだ。給与がストップし、社内預金が凍結され、早くも四カ月を過ぎようとしている。加えて終戦の混乱と異常な物価高である。そして、厳寒の満州の冬の季節が間近に迫っていた。満鉄中央試験所の最高責任者である丸沢常哉の頭を悩ませていたのは、所員たちの生活のことだった。

そのころの日本人所員は約六百名、中国人が百名。所員に生活のメドを示さな

ければならないのが丸沢の立場だった。黙していても事態は動かない。大連司令部のなかにソ連国家計画委員会が派遣したサブロフ委員会という組織がある。

サブロフ委員今はどうやら大連および大連近郊の工業施設を調査し、これをソ連国内に持ち運ぶか、現地に残すかを判断する組織のようであった。また、司令部のなかにあって、化学工業を統括管理する組織であることも丸沢たちにわかってきた。

サブロフ委員会のもとにさらにレズニック部隊という組織があった。そのレズニック部隊に所属していたヤコビツチ少佐は、しばしば中央試験所を訪問していた。ヤコビツチ少佐はソーダ工業の専門家でもあり、また英語をよくし、そんな関係で丸沢常哉とは顔なじみとなっていた。丸沢は中央試験所のおかれた窮状を訴えた。

「話はわかった。所員に俸給を支給し、食料を配給するので名簿を提出して下さい」

丸沢によれば、ヤコビツチ少佐は好人物であった。案外ことは簡単に運び、金額にすればわずかなものだったが、ともかく賃金の支払いのメドはたった。

ただ、支払われることになったのは二百人分。欠勤中の所員が多かったことに加え、中国人の職員は数名を除いて姿を見せなかったため、ソ連側は大雑把に職員二百人程度と判断したのであろう。

受け取った賃金をどう配分するか、所内では議論が起こった。これは丸沢らしいやり方なのだが、面白いのは、その配分の仕方である。丸沢はソ連占領当局から受け取った賃金を個人のものとせず、これを家族一人あたり百円の割合で再配分することに決めた。苦しいときは、お互い様というわけで、特例を認めなかった。

それでも文句が出なかったのは、丸沢がまず率先垂範そつせんすいはん、自らの特権を否認したからでもあった。例えば、丸沢の場合だと、最高は所長ということで、二千円の支給を受けることになったのだが、これをすべてはき出し、改めて百円を受け取っている。

賃金の支給が始まると、レズニック部隊は中央試験所に対して大連市内、大連近郊の各種工場に関する調査、在満各社が提出した報告書類や設備機械のマニアルを英訳することを命じている。命じられた仕事は、根岸良二博士を中心に進め

られることになった。

この厄介な交渉を、還暦を過ぎた丸沢常哉は、英語やドイツ語を駆使して、淡々とやってのけた。

終戦の直前に締結された中ソ条約に基づき、満鉄の解散と相前後して、満鉄事業のすべてが次々と中ソ合弁の中国長春鉄路公司に引き継がれた。中長鉄路と呼ばれた中ソ合弁会社は、本社を旧新京・長春におき、理事長は中国人、副理事長にはカルギン中将が任命されていた。満鉄最後の総裁山崎元幹など在新京の重役たちは、一応顧問という形で留用されているが、社員の身分に関しては曖昧なところがある、終戦のその秋まで流動的事態が続いていた。

大連図書館、満鉄中央試験所、満鉄資源館など満鉄が所有していた文化施設などは中長鉄路側から放置されていた、といってもよい状態にあった。進駐ソ連軍は戦利品の収集に忙しかったのだ。中央試験所など文化施設に関心を示さないのも当然なことで、満州を占領したソ連軍は、重要な生産設備など手当たりしだいに本国ソ連に持ち帰ることに狂奔していたのだ。

中央試験所がソ連当局の管理下におかれるようになるのは、昭和二十一年正月早々のことであつた。それより先大連鉄路局の局長に就任したラジオノフ局長が一人の老人を同伴して、研究所を訪れた。老人は七十に近い白系ロシア人で、エゴロフ教授と名乗った。そのエゴロフ教授が研究所の管理官として乗り込んでくるのである。

これと前後して、中央試験所は他の満鉄文化機関を統合して、新たに科学研究所として発足する。科学研究所に編入されることになったのは、中央試験所のほか、調査部、地質部、鉄道技術研究所、満蒙資源館、大連図書館、南満工業専門学校、小村図書館などで、責任者はいずれも従来どおり日本人を留任させた。丸沢常哉の場合も、科学研究所の所長として引続き勤務することになった。

そうはいつても、敗戦によって力関係は逆転している。丸沢はそのことを冷静に判断して、管理者としてやってきたエゴロフ教授に執務室を明け渡し、自らは吉村倫之助博士が使っていた次長室に移り、新しい権力者を迎えている。

管理体制が明確になると、ソ連側はハルビンの中長鉄路公司の管理局から人を派遣して、所員の俸給を決定することになった。だが、国共内戦が勃発して、旅大地区では陸上の交通は寸断され、食料や燃料など生活必需品の供給が途絶し、

日に日に物価は高騰していった。おまけに鉄路局（鉄道部門）の収人が激減したために、肝心な俸給は支給されず、遅配が当り前の状態になっていた。

所員の多くは街頭や闇市場で家財や衣類を売り、あるいはブローカーになり、欠勤者が続出していった。生活のためだから、それも仕方がないと判断したのであろう。それをエゴロフ管理官は黙って見過ごしていた。丸沢常哉はあくまでも心優しい人である。丸沢は『新中国生活十年の思い出』のなかで、終戦下の大連で生活苦に喘ぐ、所員や家族たちの姿を次のように書いている。

「某高級研究員の夫人と令嬢が試験所前の道路の一角でささやかな野天の煙草屋を開業したのもこのことである。煙草好きの私は、この店で買うことにしていたが、十本一箱の天津産の巻煙草がはじめ五円ぐらいであったが、だんだんと値上げになり、わずかの間に二十円ほどになった。前日の値段と思つて金を払うと、いいにくそうに『また上がりました』という令嬢の声を今もときどき思い出す」

それでも満州の奥地から引き揚げてきた開拓団などに比べれば、大連に住む市民たちの生活はまだましだったかもしれない。なにしろ彼らは裸同然で、大連に流れてきた。その数は十万人近くに達していた。研究所の職員たちも、難民対策に多忙な日々を送ることになる。大連など旧関東州はソ連軍が直接軍事占領していたので国共内戦の戦火は免れたけれど、海上封鎖が本格的になると、市民の生活苦は日を追って緊迫したものになっていた。

いつ内地から帰還船が迎えにくるか、まったく見通しが立っていない。誰の責任でもないのだが、研究所の職員たちや研究者たちの間には、次第に焦りが出てきていた。

市内では中国人との間で、ついに衝突事件が起こり、それに巻き込まれた大連高専の学生が銃殺されるなど、中国人との間で緊張した状態が続いていた。

国共内戦の勃発

昭和二十（一九四五）年八月十五日、日本にとってはこの日は歴史の重要な切れ目になった日である。が、中国にとってはそうではなかった。それは新しい内戦の始まりであった。その日から四年の長きにわたり、戦乱が続くのである。

内戦の様相は日本の敗北が決定的となった八月十一日に顕在化する。つまり、

蒋介石は八路軍総司令朱徳しゅとくに打電して「現地にとどまり、日本の降伏を受理してはならない」と命令したのに対し、中共側はこの命令を断固として拒絶し、日本占領地区への進撃を命じた。日本の降伏とともに、国共のどっちが早く被占領地区に進出するか、中国大陸では政治・軍事的に重要な問題となっていた。

八月十五日、天皇の「玉音」が放送された後を追うように、国民党蒋介石総統は「暴行に暴行をもって対することは我々の仁義の上の目的に反するものである」とする敗戦日本に向けた特別談話を発表する。

終戦が決まったその日、早くも山西省では大原に帰還した閻錫山えんせきざんは、現地日本軍と合作して中共軍の進出を食い止める戦いを始めていた。その意味で、蒋介石総統の談話は、終戦処理を巡る大陸での重要な政治的布石でもあったのだ。それでも国共双方は、和解に向けた話し合いを進めていた。



毛沢東



蒋介石

八月二十八日、毛沢東は周恩来、王若飛おうじやくひをともなつて、蒋介石が本拠を構える重慶に飛び和平交渉に臨んだ。和平交渉にはアメリカの軍事顧問団も陪席するなど、表向きは華やかな交歓が続いた。十月に入つて「双十協定」そうじゅうきょうていが結ばれ、ともかく表面的に内戦回避の方向に動いているかにみえた。

長い戦争に中国の民衆は疲れていた。民衆の願いは祖国の主権回復と内戦の回避にあったのだ。蒋介石も、その国民の声を無視するわけにはいかなかったのだ。「双十協定」はその反映でもあったのだ。しかし、国共いずれの側にも、本気で内戦を回避する意志があつたかどうかは疑問である。

実際、八月下旬に入り、林彪きか麾下の十万の軍隊は、強行軍で東北・旧満州に進軍を続けていた。林彪の軍隊は降伏した日本軍の武器を手に入れ、農村を根拠地にして、軍事制覇の機会を狙っていた。

蒋介石の軍隊も、負けてはいなかった。いや、圧倒的な軍事力を背景にして、いつきに共産軍を叩き潰す機会を窺っていたのだ。終戦が決定すると、蒋介石軍

は東北と華北に大急ぎで大軍を派遣し、アメリカもまた、海兵隊を華北に進駐させ、北京、天津地区を占領して蒋介石のために防衛線を築いていた。

国民党の軍隊が約四百万、しかもアメリカの支援を受けて装備は最新鋭。対する共産軍は約百万の軍隊を保持していた。だが、手にした武器は国民党軍には比べべくもなく貧弱なものだった。軍事的な観点からいえば、戦争が起これるとすれば、その帰趨は誰が見ても明かであった。だが、中国民衆は国民党を支持してはいなかった。なぜかというとなら国民党と国民党の軍隊はあまりにも腐敗していたからである。

日本軍が降伏したのち、接收にやってきた国民党軍隊が何をやったかというとなら金庫の所在を確かめ、在庫品を調べ、封印を施して、それを持ち去ることだった。金目のものはすべて車で持ち運び、売り飛ばしたのだ。さらに戦後インフレが庶民の暮らしを圧迫していた。国民党に対する庶民の反発は大きくなっていったのだ。これに対して、共産党の軍隊は清貧でかつ民衆に思いやりのある軍隊だった。

戦前、撫順炭礦に勤務し、戦後は中国の要請で残留することになった保本^{ほもと}弘巳は帰還してのち「撫順炭礦最終残留者の記録」と題する貴重な記録を残している。それによれば、自らの軍律を明示するなど共産軍の民衆に対する慰撫^{いぶ}工作は次のようなものであった。

「十月末中共軍がいよいよ瀋陽に入るといふ噂が入り、集中營にも何処^{どこ}からか中共軍進駐に関するビラが持ち込まれた。それには地区の治安は責任をもつて維持するので安心して家業を続けること、市民に決して暴行を加えてはならないこと、民家より借用した物品は必ず返却すること、物品の購入については必ず正価で支払うこと、民家に宿泊したときは必ず家事を手伝い、出発のときは必ず清掃して出発すること、投機を行ったものは厳罰に処する、特に婦女に対する暴行は重罰で直ちに銃殺に処するなどがこまかく書かれてあった」

保本本が読んだという共産軍の宣伝ビラは、のちに人民解放軍の軍律となった「三大規律八項注意」の原型のようである。この軍隊のすさまじいところは、規律を厳格に守るところにある。民衆から拝借したものは、たとえ針一本でも返した、というのは本当の話であった。中国では軍隊に入るような人間は錆びて使えないものにならなくなった釘のような屑人間と蔑まれたものだが、共産党が指導する軍隊は明らかに違っていた。

国民党の軍隊は文字どおり錆釘のような屑人間の集団で、腐敗の極致に達していた。対する共産党の指導する軍隊はピューリタンの清貧さの規律があり、人民を獲得することが、軍事にもまして重要な政治の課題であることを、これほど見事に証明してみせてくれた軍隊はない。共産党の浸透工作は順調に進んでいた。共産軍が解放地区で次々に農地を農民に解放していったことも、圧倒的多数の農民や知識人たちの支持を獲得することになった。

全面的な内戦が始まった昭和二十一（一九四六）年七月以降、全線にわたり国民党軍の優勢のうちに戦闘の火蓋が切られた。まず、国民党軍は東北三省・江蘇省・安徽省・湖北省・河南省・内蒙古などの各地に進撃を始め、瞬く間に十七万平方キロにおよぶ土地を手に入れた。国民党の攻勢を前に毛沢東の共産党軍は、ついには延安をも放棄しなければならぬ事態に追い込まれていった。

とりわけ、蒋介石総統が選りすぐった精鋭部隊を送った東北三省では、長春や瀋陽などを次々に陥落させていった。だが、国民党軍隊も日本軍と同様に戦線が延び切り、その勢力を拡散させることになった。対する共産軍は根拠地を転々と変えながら迫りくる胡宗南軍を分断し、得意のゲリラ戦法で国民党軍を翻弄していった。だから共産軍の撤退は、これは明らかに「戦略的撤退」であった。

「人民に奉仕する軍隊」は、戦略拠点で土地改革を進めることで農民の心を掴み、内戦二年目に入ると、人民解放軍と呼ばれるようになった共産軍は、抵抗から転じて徐々に反攻を開始した。

華南の中央平原ではついに国民党軍を駆逐して、人口三千万の解放区を築き上げる。満鉄が本拠地をおいた旧満州では林彪麾下の解放軍部隊が秋季・冬季にかけての攻勢に転じて、四平街の戦役では十五万余の国民党軍を壊滅させ、戦略包囲網を次第に狭めて、国民党の支配地域はついに長春と瀋陽など僅かな地域に追い込まれていた。

終戦の一年前、佐藤正典が化学工業委員会の委員長に就任して、旧新京・長春に赴任したとき、同じく化学工業委員会の幹事として新京に赴任した森川清は、このとき解放軍部隊が包囲網を築き上げていた長春にいた。大連に比べ、内戦のまっただなかに放り込まれた長春は、まるで地獄だった。

そこで森川は何を見たかは書き残してはいないが、同じく共産軍によって包囲された長春にいた武田英克は長春で現出した地獄図を『満州脱出』のなかに書き

残している。武田は満州中央銀行で、終戦の間際に発行課長を務めた人物だったが、長春地獄図とは飢えた人々が人肉を食らい、それはまさしく地獄としか表現のしようのない末世的な世界だった。武田英克はこんなふうに書いている。

「うつ伏せになった、幼児の死体のズボンがずり下ろされ、尻のところがガックリと切り裂かれて、真っ赤な肉が露出しているのだった。彼の右手のナイフのようなものが一瞬、陽の光にキラリと光った。私には一切の事情がのみ込めた」

内戦三年目、東北三省では毛沢東の軍隊の勝利は確定的となっていた。毛沢東の指示で林彪麾下の解放軍部隊は、錦州きんしゅう攻略作戦を開始した。錦州攻略は長春・瀋陽など、東北の中心部に勢力を構える国民党軍の補給路を封じ、退路を断つということの意味した。十月には錦州を解放、ついで瀋陽にあった三十万の国民党軍隊が撤退作戦を開始したのを捉えて、解放軍部隊は広大な包囲網を形成し、そのなかで壊滅させた。

ソ連軍は日本の関東軍を粉砕したけれども国共内戦が激化するなかで、ソ連軍の態度は微妙であり、かつ揺れをみせていた。スターリンは終戦の前夜八月十四日、蒋介石の国民政府との間に協定を結び、旧満州の主要都市の占領は遼東の関東州を除き、昭和二十一（一九四六）年の一月から六月にかけて、完全に撤収を終えて、戦略拠点を国民党軍隊に明け渡していた。だから毛沢東の共産軍はソ連の力を借りずに、独力で東北三省を解放したことになる。

生活維持のための生産活動

遼東半島を占領支配したソ連駐留軍の態度も曖昧なものがあった。その曖昧さは、日本人の帰還問題に集中してあらわれた。

大連の市内では、水面下では国民党と共産党との間で、壮絶な勢力争いが演じられてもいた。

終戦からしばらくの間は、ソ連軍政のもとで、行政を執行してきた関東州庁の長官や高官、警察官などが忽然と市内から姿を消したあと、州庁舎跡に大連市政府が発足して、市長以下の要職はすべて中国人が握ることになった。

だが、その実態をいえば、旅大地区に入った八路軍の幹部が非党員の中国人を指導、新しい市政府を発足させ、市政府の実権を握っていた。彼らは昭和二十四（一九四九）年四月に東北における共産側の勝利が縮実になったとき、はじめて

公然と党員の名乗りを上げている。

要するに、ソ連占領軍当簡は、共産党による市政権を認めなかったのである。それにしても、占領ソ連軍と市政府との関係は微妙であった。

市政府はソ連軍が管理する大企業を除き中小工場の接收を次々に開始した。続いて着手したのが町名改正と住宅の調整運動であった。町名改正はともかくとしても、やはり敗戦国民の屈辱を実感させられたのは、住宅調整運動だった。

住宅調整運動とは、要するに住宅明け渡し要求のことなのだが、住宅の明け渡しを指名された日本人は、期限を決めて否応なく移住させられた。丸沢常哉は終戦当時、女婿の妹で満鉄調査部参与安盛松之助に嫁いでいた愛子とその養女とともに生活していたが、住宅の明け渡しを要求され、元満鉄社宅に移住している。終戦当時の在連日本人の数はおよそ二十五万人。さらに満州の奥地から避難してきた開拓民など、一軒の家に数家族がひしめき合つての生活を余儀なくされた。引き揚げが開始されるまでは、何としても生き延びていかなければならぬ。だが、在連日本人の大半は失業者であつた。こうしたなかで、戦前左翼運動に関係した人たちを中心に「大連日本人民主連盟」と満鉄調査部関係者を中心とする「解放」なるグループが組織され、二つの組織が合体した「日本人労働組合」が結成されるのは、このころのことであつた。労組の科学研究所支部が科学研究所と改称された中央試験所に発足することになる。組合の規約で日本時代に管理職にあつたものは組合員たる資格を与えられなかった。

労組は労働基準を遵守することや低所得者の生活援助などを活動方針としていた。丸沢は運動の主旨に賛同して、自主的に月収の十パーセントあまりを寄付することにした。ただ、日本人労働組合の活動に対しては在連邦人の間から批判の声も出ていたようである。組合活動家の一人であつた石堂清倫は、丸沢常哉の著書「新中国生活十年の思い出」に一文を寄せて、こんなことをしている。

「敗戦国民にとつては、特殊な困難があり、そのあいだに、公共団体としての労働組合しかありませんでしたから、今日になつて往時を整理しようと思ひましても、組合運動のプラスとマイナスを科学的に検討しませんと何一つ結論の出てこない問題が多いように考えられます。私も偶然、組合に関係したものの今なお当時の行動については是非のつきかねることもあります。労働組合の科研支部にも私どもの浅見や未熟のため、無用のご迷惑をかけたことも多かろうと汗顔のいたり

に思っております」

終戦も二年目にはいると、満州奥地では国共内戦が激化して、中長鉄路の鉄道収入は激減し、給与の支払いはストップとなった。ソ連側も打つ手を失っていた。ガベツカ調査団は科学研究所をソ連の科学アカデミーに編入、研究活動再開を約束していたのだけれど、話はそれどころではなかった。

ともかく、労働組合の立場にしても、丸沢など管理者の立場からいっても、生活の防衛とカテをいかにして稼ぎ出すが重大問題だった。エゴロフ管理官の許可を得て科学研究所では所員たちの生活のカテを稼ぎ出すために、DDTの生産やらサッカリンの生産などを手掛けたりもした。根岸良二博士が偶然にアメリカの科学雑誌に掲載されていた記事を見つけ、DDTの生産に挑戦したりもした。生活費を稼ぎ出すために、ドックに入るタンカーのガス分析の試験などを引き受けたりもした。大連に入港したタンカーの修理をする場合、ガスが残存すると爆発の危険があつて作業ができないというわけで、ガス残存の有無を調べてほしいとソ連側か検査を依頼してきたのだ。

丸沢常哉も顧問として相談に乗り、ゴム管をタンカーのなかに入れ、ガスをポンプで抜き出し、それを活性炭のなかを通し、活性炭の目方の増減からガスの有無を確かめる方法などを提案した。だがこのやり方は確かに安全だが、タンカーの内部にガスが残存しているかどうかを確かめることは不可能である。このガス検査に立ち会うことになった廣田鋼蔵は、こんな思い出を話している。

「私がやったのは死なばもろともというわけで、テストのためにタンクのなかに入ってマッチを擦るのです。それが決め手だった。このテストのおかげで、だいぶ試験所に金が入りました。これはいいというわけです」

文字どおり命を張って生活費を稼ぎ出したというわけである。そんななかで、一度、原料問題で挫折したDDTの生産をやるようにと、ソ連側から特命を受けたりもした。そのいきさつを大連から帰還した後、日木触媒化学に入り専務取締役を務めた佐久間^{さくま}滋^{しげる}は次のように話している。

「根岸さんが、おそらくセッシツヒ教授から入手したのだろうと思いますが、アメリカの雑誌を示して、君これをつくってみないかというんです。そのなかにDDTの効能書が書いてあつて、蚊の発生防止のために散布している写真が載っていた。それがきっかけになって、馬力をかけてやりだしたら、時間がかかってし

まって、帰還船に乗り損ねてしまったという次第です」

「DDTというアメリカの商品名では、具合が悪い。こんなところにも、顕在となっていた米ソ冷戦の影」が見え隠れしていたのであろう。DDTの名称を嫌って、成分から「ペンタクロラン」と命名され、所内にはさっそく生産委員会が発足した。班長には根岸良二博士が任命され、石川三郎、佐久間滋、小田憲三などそうそうたる研究者が動員され、研究員以下三十名の所員が共同して生産にあたった。

DDTの生産は技術的にそう難しい問題はない。ソ連側から原料の供給を受けて、生産は計画どおりに進んだ。しかし、この生産委員会のメンバーの大半は、DDT生産が重要だということで、ソ連側に留用され、帰国の機会を失うことになった。ただ、原料が入手できず、結果は失敗に終わった。

帰還を前に強引な留用工作

大連に置き去りにされた邦人の引き揚げが開始されるのは、昭和二十二年一月からのことであった。待ちに待った内地帰還を目の前に控えて、幾つか困った問題が起こった。日本人の引き揚げに関しては、ソ連軍司令部と大連市政府との間で、必ずしも意見の一致をみていなかったのだ。帰国を前にして、少しばかり混乱が生じたのはそのためである。

ソ連側は特殊の例外を除いて、帰国を希望するものは、全部帰すという方針だった。というのは、国共内戦の激化で、とても研究活動を再開させるどころの話ではなくなり、科学研究所や図書館など文化施設を維持するには、あまりにも膨大な資金を要するため、ソ連側は日本人を早期帰還させることに方針を軟換していたのだ。

だが、中国側は戦争で荒廃した工場施設を復興させるには日本人技術者の協力が必要だった。科学研究所に関する限り、あまり深刻な問題は起こらなかったが、中国側は日本人技術者の留用工作を必死で行っていた。

その先頭にたったのが、科学研究所の副管理官として乗り込んできた廖華^{りょうか}であった。廖華という人は福建省の出身で、中国の法文系大学を卒業していた。バリバリの共産党員で、幾度か蒋介石の特務機関に逮捕されたりもしたけれど屈することなく、自らの信念に生きた人であった。たぶん、共産党の使命を帯びて来

連したのであろうが、大連市政府では高い位置を占めていた。英語を多少理解し、丸沢とは英語でやりとりをしている。

中国側の留用工作は、科学研究所だけでなく、広範囲にわたっていた。廖華とは別系統の組織になるが、中国建設学会が細織され、満州奥地の経済復興のため、大勢の日本人技術者は大陸の奥地に散っていった。

廖華も熱心に大陸奥地での経済建設に日本人技術者の協力を求め、丸沢も廖華の要請に応え、科学研究所から希望者を募り、奥地に派遣した。だが、奥地に散った技術者の多くは、例えば、北朝鮮を経由して北満に入った今井栄量などは、吉林で病死するなど、辛酸をなめることになる。

たぶん、そのことに丸沢常哉は幾分かの責任を感じたのであろう。次のような鎮魂の言葉を残している。

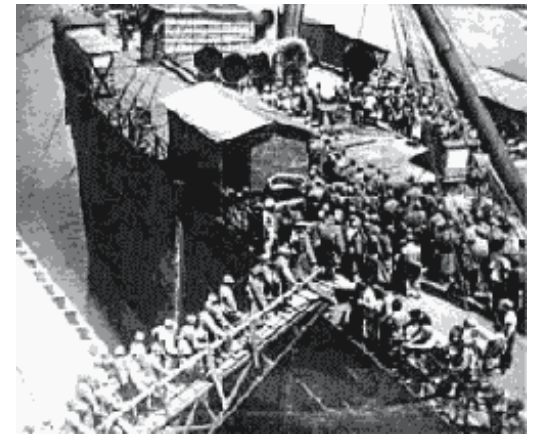
「かつては大満鉄の電気事業のリーダーであった今井さんが、このような運命に遭われたことは誠に痛恨の極みである」

今井栄量だけでなく、多くの日本人技術者が満州の奥地に旅立ち、消息を絶った。当時大連に流れた噂では、彼らの多くは受け入れ側が期待したような高級技術者ではなかったため、一行を各地に分散したともいう。それも消息がわからなくなった大きな理由であろう。ともかく、中国建設学会を通じて、奥地の経済建設に参加した技術者たちの運命は悲惨だった。

そのなかの一人で、『人民服日記』という記録を残している笹倉正夫は炭鉱の出水事故の責任を追及され、牢獄生活を送ったりもした。

が、彼らの多くはよく苦難に耐え、各種の建設に協力して人きな成果を上げた。日中関係の隠れた歴史を作り上げたという意味で、彼らの仕事は後世から正しく評価されるべきだと思う。

在連邦人の誰もが望郷の思いにかられていた。そうしたなかで帰国第一船が大連の港に入港する。高級技術者はできるだけ留用させる方針でいた大連市政府は強権を発動して、日本人の帰還を露骨に妨害したりもした。ともかく、凶共内戦



引き揚げ船

が共産側に有利に進展するなかで、戦後の復興をになう人材が彼らには必要なのであったのだ。

佐藤正典も腸華の強引な留用工作で、帰還が危ぶまれ、立ち往生した一人であった。大連で終戦を迎えた佐藤は科学研究所に戻ることもかなわず、当時はソ連脱穀廠の顧問を務めていたが、最愛の妻が病床にあったことも、人一倍帰還に想いを募らせることになった。

佐藤は丸沢に相談のうえ、帰還を願い出ることにした。中央試験所の所長を務め、大豆油脂の研究で名声を得ていた佐藤は、中国人のなかでも広く知られていた。

その佐藤の帰還にすなりと同意するとは考え難いことであった。案の定というべきか科学研究所の副管理官廖華は、強引に引き留め仕事を始めた。容易に帰国は許されそうになかった。佐藤は病床の妻を見守りながら、施すすべもなく苦慮するばかりであった。すでに帰国の内諾を出しておきながら大連市政府の態度は煮えきらない。佐藤は意を決して直談判におよんだ。

「あなたを帰すように廖華さんは約束されたけれど、最高首脳合議で、もう一度再考を促すことになった。あなたは大豆の専門家としてやはり帰せないという結論になったのです」

というのが市政府の回答だった。佐藤は憤然として、反論を試みた。

「中共の人は、そういうように前言をひるがえ翻すのですか。そういう人とは私は今後残って行動をともしにするわけにはいかない」

だが、それで佐藤の帰国が許されたわけではなかった。中国側もしぶとかった。佐藤が苦境に陥っていることを知って丸沢が乗り出した。丸沢は剛直な人間である。それに佐藤のことを心から心配していた。丸沢は軀を張って、市政府側に佐藤帰国に同意するように迫った。丸沢は廖華副管理官をつかまえて、こう迫ったのである。

「もし作藤博士を強制的に留用されるならば、私は残留を取り消し、ソ連に訴えて帰還の許可を得ることにする。佐藤・丸沢両名のうちどちらを取るか、選択はあなたに任せる」

丸沢常哉が科学研究所の大黒柱であることは、廖華も市政府の首脳も知っている。いってみれば、丸沢常哉という人物があつてこそその科学研究所であった。そ

の丸沢が佐藤を留用するのであれば、自分は帰還船に乗るといい出しているのだ。廖華も譲歩せざるを得なかった。

佐藤が第一次帰国船「大海丸」に乗船するのは、昭和二十二年三月二十八日のことであった。その日は、大連の上空を鉛色をした厚い雲が覆い、春三月とはいえ、寒風吹きすさぶ肌寒い日だった。大海丸はゆっくりと大連の波面場を離れた。そこで佐藤は終戦以来の鬱積した焦燥の思いが、いつきに吹き飛んだと書き残している。九州帝国大学を卒業して、三十余年の間、研究者としてのエネルギーのすべてをつぎ込み、深い思い出が残る大連は遠くかなたに霞んでいく。

帰国に先立ち、丸沢と佐藤はある約束を交わしていた。佐藤は大連を離れる船上で、その約束を思い出していた。

「佐藤君、君の交友関係の広さを利用して、帰還する中央試験所の技術者たちの就職の斡旋を是非とも頼みたいのだ」

丸沢常哉は祖国日本のおかれた状況を知っていた。植民会社である満鉄は、財閥系会社と違って、内地にはなんのよりどころも持たない。敗戦の混乱のなかで、帰国する中央試験所の科学者や技術者たちは、満足に糧道りょうどうを得られるかどうか、それが心配だった。その仕事を佐藤にやつてもらいたい、と丸沢は考えていたのだ。

「先生、わかっています。期待に応えられるように尽力してみます」

「是非とも頼むよ、佐藤君！」

のちに詳しく触れるが、佐藤は丸沢との約束を固く守り、帰国後戦火の傷の生々しく残る祖国で、献身的努力を重ねて、帰国満鉄社員就職の斡旋に動いたことは、関係者が等しく認めるところである。この師弟は大陸と内地に別れて住むようになったけれど、大陸に残った丸沢常哉は残留技術者とともに苦難の道を歩み、また、帰国した佐藤正典は敗戦下の祖国日本で、満州大陸から次々と帰還してくる満鉄技術者の受け入れで、忙しく動き回ることになる。

中国側への移管準備

第一回の帰還船で二十万余の日本人が大連から姿を消した。旧中央試験所には留用された日本人は数名の女性を含め、八十名あまりとなった。それ以外にも日本人技術者の幾人かは中国側の要請で、奥地の経済建設に散っていったものもい

る。最盛期には一千名の規模を誇った中央試験所は寂しい限りであった。

日本人の引き揚げと前後して、科学研究所に変化の波が押し寄せていた。国共内戦は激化の一途を辿り、交通は寸断され、大連鉄路局は赤字が続ぎ、科学研究所のような非生産部門を抱えられるような状態ではなくなっていた。すでに所員の給与を支払うだけのゆとりもなくなり、遅配欠配が恒常的な状態となっていた。科学研究所の改組は、そうした経済苦境に対応する措置でもあったのだ。

まず科学研究所の傘下におかれた工業専門学校が廃校と決まった。満鉄の伝統を誇る調査部も廃止となった。調査部の幾人かはラジオノフ大連鉄路局長の特命事項の調査にあたることになった。鉄道技術研究所も科学研究所から分離され、鉄路局の直接管理のもとにおかれることになった。

また、科学研究所傘下の各機関の首長も日本人の任用が解かれ、顧問という職名が与えられた。丸沢常哉の場合だと「特別顧問」ということになり、また、この機構改革でエゴロフ管理官は更迭され、新たにフィロポフ大尉が管理官として赴任してきた。

こうしたなかで、科学研究所は経済的にも自立化が要求されるようになり、日本人の引き揚げが開始されて間もなく、市政府は残留日本人の生活を援助するために、生産活動を再開するという名目で、科学研究所に百万円の資金を提供した。そこで科学研究所には生産委員会が組織され、酒精や塩素酸カリなどの生産が計画された。

酒精班の責任者には六所文三博士が任命されるなど、生活のためとはいえ、もったいないような優秀な科学者が生産活動を指導することになった。

だが、生産委員会の活動は半年あまりで中断することになる。国民党による遼東半島の封鎖が続くなかで、食料不足が深刻となり、その食料の高梁や粟を原料とする酒精を作るとは何事かということで、ついに市政府が酒精生産を禁止してきたのだ。その事後処理を巡って丸沢常哉は廖華副管外官と決定的な対立を引き起こしてしまう。

「馬鹿野郎」

と叫んでしまったのである。丸沢にしては珍しく激奮したのだ。いつてみれば通訳を挟んでの言葉の行き違いから生じたことなのだが、旧中央試験所の研究者の帰還問題が起こってから、市政府のやり方に丸沢が苛立ちを覚えていたことも

事実。廖華は通訳で丸沢のはいた言葉の意味を知り、これも激しく怒った。二人はその日から一週間もの間、同じ所内にあって口も利かなかった。心配したのは周辺である。

「いかなる理由があるにしても、留用の身分で中共の幹部を罵倒したとあつては、残留日本人に不利益となる。両者を和解させるために調停する必要がある」

との声が高まり、関係者の幾人かが調停を買って出た。そのなかの一人、日僑勤労者組合に改称された旧日本人労働組合の委員長を務めていた石堂清倫が丸沢を訪ね、廖華との和解を説得した。さすがに丸沢も石堂の説得に応じて、廖華に詫びを入れた。廖華もなかなかの人物である。丸沢の手を握りながらこういったものである。

「いや、私こそすまないことをした」

生産活動から撤収した科学研究所の仕事といえば、所内の文献整理に重点が移されることになった。だが、この仕事は科学研究所が中国側の管理に移管されたのち、研究活動を再開する上で、重要な意味を持っていた。

(つづく)

なお、挿入されている写真は原著とはことなり、戦略経営研究所の責任で入れさせていただいた。著作権などの問題がないように努めているが、万が一の場合には、ご容赦お願いする次第である。

旧満鉄本社（大連）

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%97%E6%BA%80%E5%B7%9E%E9%89%84%E9%81%93>

旧満鉄中央試験所（大連）

<http://homepage.mac.com/xiaogang/architecture/oldmanchuria/dalian/dalian5.html>

蒋介石

<http://kecn.konan-u.ac.jp/keizai/china/01/02.html>

引き揚げ船

<http://www.city.kitami-ig.jp/650-03/100/nupunkesit00.htm>